別紙

治山施設等の名称　　「先人の知恵とヒバの耐久性を伝える木製堰堤」

所在地　　青森県五所川原市大字飯詰字飯詰山国有林104林班外

工事期間　　大正５年　～　昭和３３年

施設・工法の概要

木製えん堤11基

渓岸及び渓床を固定して、山腹の崩壊及び不安定土砂の移動を防止し、下流域への土砂流出を抑止する。谷止工（コンクリート）

解説（要約）

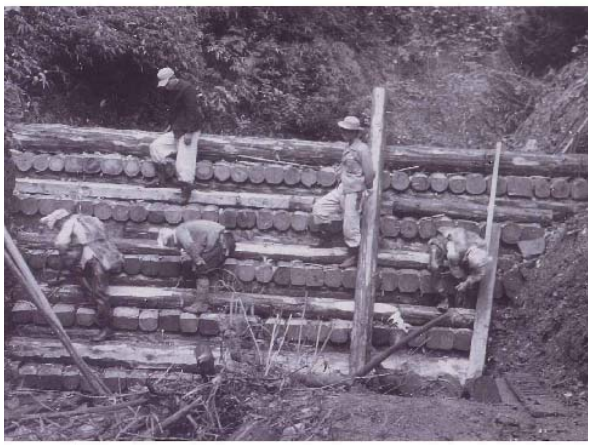
ここ坪毛沢は、地域住民から暴れ沢として恐れられていたが、資材運搬路のなかった当時、現地資材のヒバ被害木を活用し、先人の知恵とヒバの持つ特徴を活かして施工されている。

現在では、多少の損傷はあるものの、半世紀以上の年月が経過した今でも、本来の役割を十分に果たし、地域の人々の生活を守り続けている。

解　　説

五所川原市飯詰川をはじめとする当該地区一帯の水系は、すべて津軽平野を貫流し、さらには岩木川に流入し、日本海に注いでいる。

津軽の「こめぐら」と言われている穀倉地帯は、五所川原市十三湖を河口として、一面湿地帯であったが、１６５６年（明暦２年）になって、津軽四代藩主信政公が開田を積極的に奨励し、水田面積が飛躍的に増大した。この結果、水不足に悩まされ、一帯では常に争いが絶えなかったと言われている。



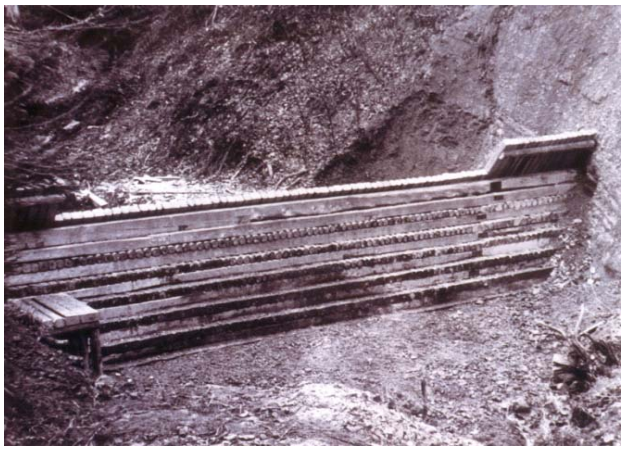
工事中の状況

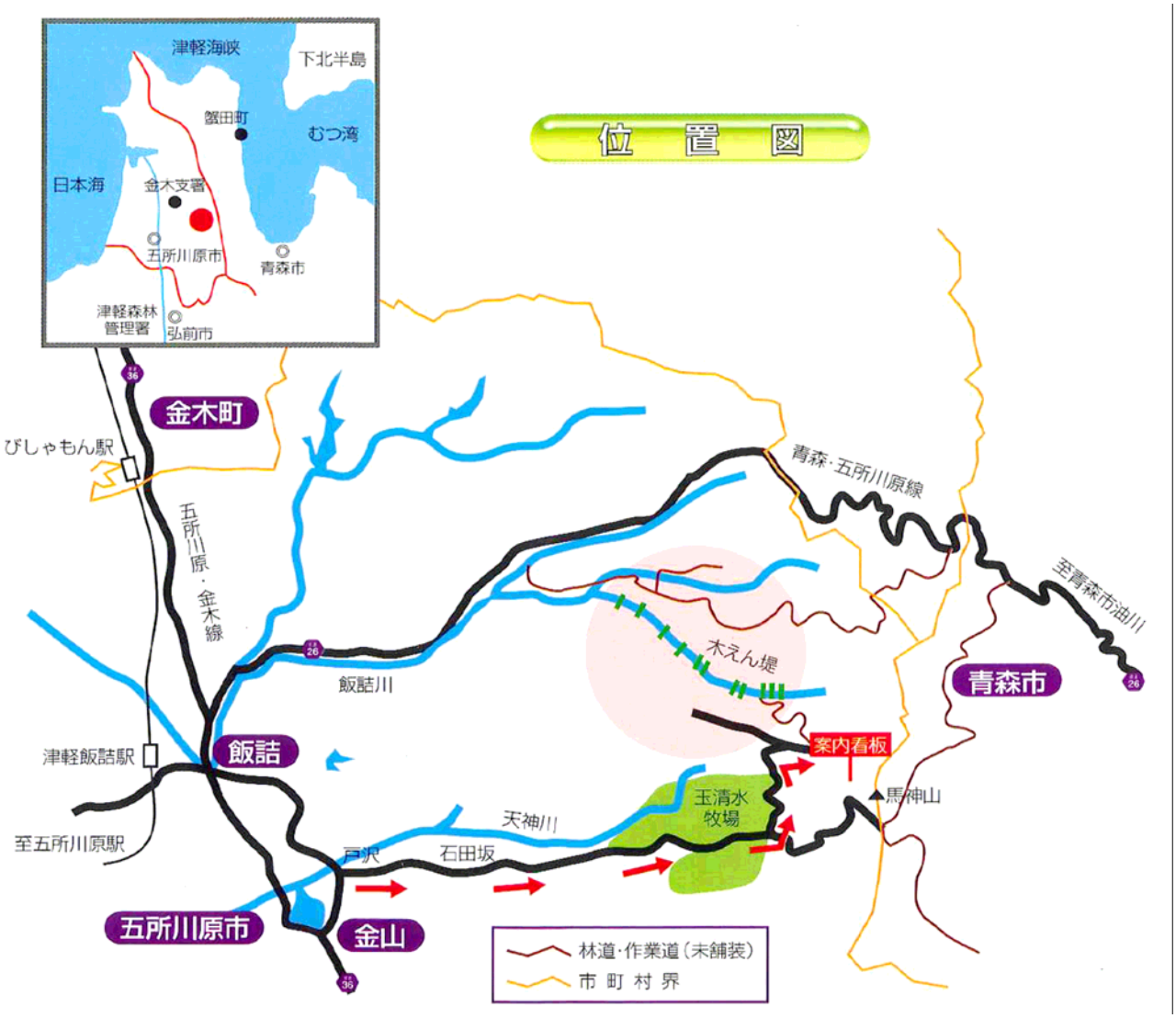
国有林の治山治水の管理は重要な使命を帯びつつも、五所川原市飯詰川を本流とする坪毛沢一帯の地質は、第三紀中新世、馬の神山層に属し、この構成核部は緑色凝灰岩と硬質頁岩で、これに多くの粗粒玄武岩が岩脈または岩床として介在しており、水に非常に弱い土質で、昔から暴れ沢として地元住民から恐れられていた。

大正時代には、ヒバ被害木を利用し木製えん堤を６基施工しましたが、昭和１７年以降、戦中戦後という事情もあって昭和２８年まで保全事業の空白があり、この間、両岸いたるところ崩壊の連続であったと記録されている。この頃になると、コンクリート工事は可能ではあったが、現地の地質は第三紀層にして砂質頁岩及び凝灰岩層により骨材採取不可能、また、搬路のない当時としては資材運搬不可能との理由から木製えん堤が採用された。

現在では、水衝部の部材が摩擦によって細くなり、結束状態がゆるんで一部の部材が抜け落ちたり、

損傷が進んでいますが、大正、昭和、平成と半世紀以上にわたり木えん堤は驚くべき耐久性を発揮して現役で活躍している。



完成当時

現在の状況